

詩集『鈴の音』より (1) ——イクバルのウルドゥー詩 (14) ——

松村 耕光\* 訳

はじめに

今回は、ムハンマド・イクバル (Muḥammad Iqbal, 1877-1938) のウルドゥー第1詩集『鈴の音 (Bāng-e Darā)』(1924年) から、イクバルの政治意識をよく示す、以下の8篇の詩を訳出した。

- (1) 「ヒマラヤ (Himālah)」
- (2) 「サイイド・アフマド・ハーンの墓碑銘 (Sayyid kī lauḥ-e turbat)」
- (3) 「インドの歌 (Tarānah-e Hindī)」
- (4) 「インドの子供たちの愛国歌 (Hindūstānī bachchōn kā qaumī gīt)」
- (5) 「新しい寺 (Nayā shiwālah)」
- (6) 「アブドゥル・カーディルに寄す (‘Abd al-Qādir kē nām)」
- (7) 「ムスリム共同体の歌 (Tarānah-e millī)」
- (8) 「ナショナリズムすなわち一つの政治概念としての祖国 (Waṭanīyat ya‘nī waṭan ba-ḥaiṭhīyat ek siyāsī taṣawwur kē)」

(1) から (5) は、1905年から1908年にかけてのイギリス、ドイツ留学以前の、ムスリムとしての意識よりもインド人としての意識が強かった時代の作品、(6) は留学中の、(7)、(8) は留学後の、イスラーム信仰やムスリム意識が強く自覚されるようになった時期の作品である<sup>1)</sup>。

---

\* 大阪大学大学院言語文化研究科教授

1) (1) から (6) の詩の書誌情報に関しては、下記の書を参照した。  
Ghulām Rasūl Mihr, *Maṭālib-e Bāng-e Darā*, Lahore, 1982.  
Giyān Chand, *Ibtidā‘ī Kalām-e Iqbal: Ba-Tartīb-e Mah-o-Sāl*, Hyderabad, 1988.  
詩集収録時に詩句の変更が行われているが、本稿では日本に言及のある部分を除いて、特に指摘しなかった。  
(7)、(8) の詩に関しては、書誌的な情報が見つからなかった。

## ヒマラヤ<sup>2)</sup>

おお、ヒマラヤよ、インドの国の城壁よ  
天は身をかがめておまえの額に口づける  
おまえには老いの表れがなく  
循環する朝夕の中にいるのに常に若々しい  
神の顕現はシナイの対話者には一度しかなかったが<sup>3)</sup>  
明敏な眼はおまえの全身に神の光を見る

肉の眼では山としか見えないが  
おまえは私たちの守護者であり、インドの防壁である  
おまえは詩集であり、天はその初句である  
おまえは人を惹きつけ、内省へと誘う  
雪がおまえの頭に巻いた栄誉のターバンは  
世界を照らす太陽の冠を嘲笑っている<sup>4)</sup>

これまでの歴史はおまえにとっては一瞬の出来事である  
おまえの谷間には黒い雨雲が野営し  
おまえの頂きは昴との会話に夢中になっている  
地上にありながらも広大な天空こそおまえの祖国である  
おまえの麓に湧き出た泉は液体の鏡  
風の揺れ動く裾はその拭き布である

風の駿馬を打たせようと雲の手に  
山頂の稲妻は鞭を与えた<sup>5)</sup>  
おお、ヒマラヤよ、おまえもまた  
自然の手が四大のために作り出した競技場なのであろう  
ああ、雲は歎びにどれほど身を震わせて流れて行くことか  
鎖を解かれた白象のようである

2) 詩集『鈴の音』巻頭を飾る詩。イクバルの友人アブドゥル・カーディル (‘Abd al-Qādir, d. 1950) が発刊した雑誌『マフザン (Makhzan, 宝庫)』1901年4月号(創刊号)に「ヒマラヤの山並み (Kōhīstān-e Himālah)」という題名で掲載された。『マフザン』創刊号では詩の部の最初に掲載されている。アブドゥル・カーディルは、詩集『鈴の音』に寄せた序文で、この詩は、ラホールの或る文学サークルで詠まれ、「イギリス的な詩想があり、ペルシア的な形態があった。さらに愛国主義 (waṭan-parastī) の味わいもあった。時代精神や時代の必要に合致していたため、非常に好評を博した」と述べている。

3) 「シナイの対話者」シナイ山で神と話をしたモーセ (Mūsā) のこと。

4) 日光ですら雪を溶かすことができないということ。

5) 稲妻を鞭に見立てている。

朝のそよ吹く風は揺り籠となった  
 どの蕾もいのちに酔って揺れている  
 蕾は無言であるが、花びらの舌はこう語る——  
 「花をもぎ取ろうとする者の手を見たことがない  
 私の沈黙はこう語る——  
 深山幽谷の片隅こそ私の住処である、と」

高い山から清流が歌いながら流れ出る  
 カウサルやタスニームの波を恥じ入らせながら<sup>6)</sup>  
 大自然という佳人に鏡を差し出しながら  
 岩を避け、岩にぶつかりながら  
 心に染み入る調べを奏で続けよ  
 おお、旅人よ、心にはおまえが発する楽の音がよく解る<sup>7)</sup>

夜の美女<sup>ライラー</sup>が現れてその豊かな黒髪を解くとき<sup>8)</sup>  
 滝の音が心の裾を引き寄せる  
 言葉がその身を捧げる夕暮れの静寂  
 沈思の時が訪れた樹木  
 見事な夕日が山肌で揺らめき  
 おまえの頬を美しく染め上げる<sup>9)</sup>

おお、ヒマラヤよ、物語を聞かせよ  
 おまえの麓が人類の祖先たちの住処となっていた時代の物語を  
 簡素な生活の物語を  
 仕来りの紅に染まっていなかった時代の物語を  
 さあ、想像の力よ、再びあの日々を見せよ  
 昔へと——おお、時の流れよ——逆戻りせよ

### サイイド・アフマド・ハーンの墓碑銘<sup>10)</sup>

- 
- 6) 「カウサル (Kauthar)」、「タスニーム (Tasnīm)」前者は天国にあるとされる川もしくは泉、後者は泉。  
 7) 「旅人」清流のこと。  
 8) 「ライラー (Lailā)」アラビアの有名なライラー・マジヌーン (Majnūn) 物語の女主人公。「ライラー」は夜を意味するアラビア語 *lail* の関連語。  
 9) この連と次の連との間の3連が詩集収録時に削除されたが、そのうちの1連には次のように日本への言及が見られ、「仏教信条への言及である」という脚注が付けられている。  
 存在否定の真理の法則を告げ知らせる声——  
 それによって魂は不死の水を味う  
 それによって愛の法則の面から覆いが取り払われ  
 真理の秘密を知る手がかりが人間に与えられた  
 おまえの麓のそよ風によってこの木は生え出たのである  
 その根はインドにあり、その果実は中国、日本にある  
 10) 『マフザン』1903年1月号に掲載された。サイイド・アフマド・ハーン (Sayyid Ahmad Khān, d. 1898) は、インド

命の鳥が息の縄に縛られている者よ  
魂の鳥が鳥籠に囚われている者よ  
この花園の自由な歌い手たちを見よ  
荒れ果てていた町の繁栄振りを見よ<sup>11)</sup>  
これこそ私が気にかけていた宴である  
これこそ忍耐という畑の収穫物である  
私の墓碑は語りたと思っている  
心でその銘をしっかりと見よ

この世に宗教を教え弘めることがおまえの目的なら  
人々に世を捨てよと説いてはならぬ  
党派を形成するために口を開いてはならぬ  
それは終末の日の騒乱を招く  
おまえの書いた物によって団結の基が築かれるように  
誰もおまえが口にした言葉に苦しめられたりしないように  
新しい宴の席で昔の話など蒸し返してはならぬ  
この時代にふさわしくない話などしてはならぬ

おまえが政治家であるなら、私の言うことを聞くがよい  
勇気こそ政治に携わる者が持つべき杖である  
要求するのを憚るのは好ましいことではない  
心にやましいことがなければ何も案ずることはない  
信念を持つ者の心には恐れもなければ欺瞞もない  
支配者の威光にも怯むことはない

もしおまえの手に奇跡を生み出す筆があるのなら  
もしおまえの心の酒杯がジャムシード王の酒杯のようであるのなら<sup>12)</sup>  
慈悲深き御方の弟子よ、自分の舌を清らかに保つがよい  
自分の声が名誉を失わぬよう用心するがよい<sup>13)</sup>  
詩句の奇跡によって眠れる人々を目覚めさせよ  
声の焰によって虚偽の山を焼き払うがよい

---

北部のアリーガル(Aligarh)にムスリムのための高等教育機関を設立するなど、ムスリムの発展に尽力した啓蒙思想家。ウルドゥー語圏では、サル・サイヤッドと呼ばれることが多い(サルは英語の sir——1888年に Knight Commander of the Order of the Star of India に叙せられた——、サイヤッドはアラビア語の sayyid)。

11) 「この花園」、「荒れ果てていた町」 インドのことであると思われる。

12) 「ジャムシード王の酒杯」 古代ペルシアの伝説上の王ジャムシード(Jamshīd/ Jamshēd) は世界の様子が映し出される酒杯を所有していたと言われている。

13) 「慈悲深き御方の弟子」 慈悲深き御方とは神のこと。詩的靈感は神から授けられるという考えからこのような言い方をしている。

### インドの歌<sup>14)</sup>

私たちのインドは世界一  
私たちは夜鶯<sup>フルフル</sup>で、インドは私たちの薔薇の園<sup>15)</sup>  
国を離れていても心は国に残ったままだ  
思っ<sup>フルフル</sup>て欲しい、心があるところに私たちもいるのだと  
世界一の高い山、天と肩を並べるあの山は  
私たちを守護し、私たちを防護する  
その膝元では何千もの小川が戯れていて  
おかげで花園は天国も羨むほどの美しさ  
ガンジスの流れよ、覚えているか  
私たちがおまえの岸に現れた日のことを  
宗教は憎しみ合えとは教えていない  
私たちはインド人、私たちの祖国はインド  
ギリシア、エジプト、ローマは滅んでしまったが  
私たちの名と存在は今もある  
私たちが滅ばないのには訳がある  
天はずっと私たちの敵だったのに  
イクバルよ、この世に親友は一人もいない  
私の胸の苦しみを知る者などいるだろうか

### インドの子供たちの愛国歌<sup>16)</sup>

チシュティーさまが神さまのお言葉をお聞かせになったところ<sup>17)</sup>  
ナーナクさまが唯一の神さまについて歌をお聞かせになった花の園<sup>18)</sup>  
タタールの人たちが祖国としたところ  
ヒジャーズの人たちにアラビアの砂漠を捨てさせたところ<sup>19)</sup>  
そこが私の祖国です

14) ラクナウーの雑誌『イッティハード』(Itihād, 連帯) 1904年8月16日号、カーンプルの雑誌『ザマーナ』(Zamānah, 時代) 1904年9月号、『マフザン』1904年10月号に掲載された。『イッティハード』誌では無題、『マフザン』では「私たちの国(Hamārā dēs)」という題名であった。『ザマーナ』誌にどのような題名で掲載されたのかは不明。

15) ウルドゥー詩の伝統では、夜鶯(bulbul)は薔薇を恋い慕っているとされる。

16) 『マフザン』1905年2月号に掲載された。メフルによれば、原題は「或るインドの少年の歌(Ēk Hindūstānī larkē kā gīt)」であったということであるが(Ghulām Rasūl Mihr, *op. cit.*, p. 94)、ギヤーン・チャンドは、「私の祖国(Mērā waṭan)」という題名であったと述べている(Giyān Chand, *op. cit.*, p. 274)。原本が見つからないため、確認できない。

17) 「チシュティーさま」南アジアにスーフイズムを普及させるのに貢献したムイーヌッディーン・チシュティー(Mu'īn al-Dīn Chishtī d. 1236)のこと。

18) 「ナーナクさま」シク教の開祖ナーナク(Nānak d. 1539)のこと。

19) 「ヒジャーズ(Hijāz)」メッカ、メディナのある地域。

ギリシアの人たちを驚かせたところ  
世界中に知識を与えたところ  
神さまが土を金のようにしてくださったところ  
トルコ系の人たちの懐をダイヤで一杯にしたところ  
そこが私の祖国です

ペルシアの夜空に砕け散っていた星々を  
再び銀河のように光り輝かせたところ<sup>20)</sup>  
世界が唯一の神さまの調べを聞いたところ  
アラビアの指導者さまに涼やかな風を送ったところ<sup>21)</sup>  
そこが私の祖国です

住民がみなモーセであり、山がみなシナイ山であるところ<sup>22)</sup>  
ノアの舟が流れ着いたところ<sup>23)</sup>  
高い大地が天空への階段となっているところ<sup>24)</sup>  
生活が天上での生活であるようなところ  
そこが私の祖国です<sup>25)</sup>

### 新しい寺<sup>26)</sup>

バラモンよ、気を悪くしないなら、率直に言おう  
おまえの寺の神像はもはや時代遅れになっている  
おまえは仲間に敵意を抱くことを神像から学び  
神はイスラームの説教者に闘争することを教えた  
愛想が尽きて私は寺院にもモスクにも行くのをやめた  
イスラーム説教者の説教もおまえの説教も聞くのをやめた

---

20) ペルシアの数多くの詩人、文人などがインドに移住し、庇護されたことに言及している。

21) 「アラビアの指導者さま」イスラームの預言者ムハンマドのこと。「インドから涼風が吹いてくる」とイスラームの預言者ムハンマドが語ったという真偽不確実な伝承があるということである。

22) 住民全員が神の光を見たモーセのように優れた人たちであり、山はすべて神が顕現したシナイ山のように神々しいということ。

23) ヒマラヤの山頂を指している。ノア(Nūh)の箱舟が流れ着いたという伝承があったのか、インド神話のマヌ(Manu)と大洪水の物語の影響なのか——大洪水の際、マヌの乗った舟はヒマラヤに着く——、よく解らない。

24) 「高い大地」ヒマラヤのこと。

25) 『マフザン』掲載時には、この連の次に、以下のような、日本に言及した連があった。

ゴータマの故国、日本には聖地  
イエスを愛する者たちには小さなエルサレム  
イスラームに従う者たちが埋められているところ  
花園の花一輪一輪が天上の楽園であるようなところ  
そこが私の祖国です

26) 『マフザン』1905年3月号に掲載された。「寺」と訳した語は shiwālah で、ヒンドゥー教シヴァ派寺院のこと(正しくは、shiwālā)。

石の神像に神が宿るとおまえは信じるが  
 祖国の土一粒一粒が私にとっては神である

さあ、よそよそしさの覆いを今一度取り払い  
 離れた者たちを再び結びつけ、分裂の印を消し去ろう

心の街はずっと荒れ果てたままである  
 さあ、この国に新しい寺院を建立しよう

私たちの聖地は世界のどの聖地よりも高いところになければならぬ  
 さあ尖塔を天の裾に届かせよう

毎朝、起きては甘美な賛歌を歌い  
 礼拝する者すべてに愛の美酒を飲ませよう

信仰する者の歌には力がある、安らぎがある  
 この世に住む者の救いは愛の中にある

アブドゥル・カーディルに寄す<sup>27)</sup>

立ち上がれ、東の空が暗くなってしまった  
 言葉の焔で宴を照らすのだ

私たちはハルマラの種子のように泣き声を上げることができる  
 泣き声で宴に騒乱を引き起こすのだ<sup>28)</sup>

宴の人々に恋の研磨力を見せつけよう  
 今日の石を明日の鏡に変えるのだ

消えたヨセフの姿をまた見せて  
 ブライハーの血潮以上に人々を燃え立たせよう<sup>29)</sup>

この花園に成長の法則を教え  
 取るに足らぬ夜露を大河に変えるのだ

中国の偶像寺院にすぎるのはもうやめよう  
 人々をスウダーやサリーマーの美貌の虜にしよう<sup>30)</sup>

見よ、ヤスリブではライラーの駱駝は魅力を失ってしまった  
 カイスに新たな願望を教えよう<sup>31)</sup>

27) 『マフザン』1908年12月号に掲載された。イクバルがラホールに戻ったのは7月であるが、この詩は、イクバルが留学から帰国した1908年以降の作品を収めた、詩集『鈴の音』の第3部ではなく、留学期(1905年から1908年まで)の作品を収めた第2部に入っている。アブドゥル・カーディルは註2で言及した、『マフザン』を発行した人物。

28) ハルマラ (*Peganum harmala*) の種子は火にくべられると音を立てる。

29) 美男奴隸ヨセフ (*Yūsuf*) に主人の妻ブライハー (*Zulaikhā*) が恋した物語に基づく(コーラン「ヨセフの章」、旧約聖書「創世記」39章を参照)。

30) 「スウダー (*Su'dā*)」、「サリーマー (*Salīmā*)」アラブの女性名。イスラームを意味する。

31) 「ヤスリブ (*Yathrib*)」メディナのこと。

「ライラー」、「カイス (*Qais*)」美女ライラーを恋する青年カイス——マジヌーンすなわち「(恋の)狂人」とも呼ばれる——は、他の男と結婚させられて婚家へと向かうライラーの乗った駱駝の後を追った。

酒は古く、そして強くなければならぬ  
酒杯、酒入れ、酒瓶すら溶かしてしまうほど<sup>32)</sup>  
西洋の冬を暖かく過ごさせてくれたこの火傷<sup>33)</sup>  
胸を引き裂き、人々に見せるとしよう<sup>33)</sup>  
世界の宴を蠟燭のように生きるのだ  
自ら燃えて人々の視界を明るくしよう  
蠟燭は心をよぎることをすべて口にする  
燃えようとする——そのことを蠟燭は心に秘めておくことはできぬのだ<sup>34)</sup>

### ムスリム共同体の歌<sup>35)</sup>

中国もアラビアも、そしてインドも私たちの祖国  
私たちはムスリム、全世界が私たちの祖国  
一神教の教えをしっかりと私たちは胸に預かっている  
私たちの名と存在を消し去るのは容易ではない  
世界の偶像寺院の中に初めて現れた神の家<sup>36)</sup>  
それを私たちは守る、そしてそれは私たちを守る  
剣の陰で私たちは育った  
新月の短剣こそ私たちの印<sup>37)</sup>  
西欧の谷間に私たちの礼拝開始を告げる声がかどましたことがある  
何者も私たちの怒涛の進撃を止めることはできなかった  
天よ、私たちは虚偽に負けたりはしない  
おまえは何度も私たちに試練を与えたが  
アンダルシアの花園よ、おまえは覚えている  
おまえの枝に私たちの巣があった日のことを  
ティグリスの波よ、おまえも私たちを知っている  
今でもおまえの川は私たちのことを物語っている  
聖なる土地よ、おまえの名誉のために私たちは戦い、死んでいった  
今でも私たちの血がおまえの血管を巡っている<sup>38)</sup>  
私たちを率いるのはヒジャーズの指導者様<sup>39)</sup>  
その御尊名によって私たちの心は安らぎを得る

32) 「酒」 ここではイスラームを意味する。

33) 「火傷」 イスラームへの熱き想い。

34) 原文ペルシア語。インドのペルシア語詩人ベーディル (Bēdil d. 1720) の詩句。

35) 初出情報なし。

36) 「神の家」 カアバ神殿のこと。

37) イスラームの象徴である新月は短刀に似ている

38) 「聖なる土地」 メッカ、メディナのあるヒジャーズ地域を指す。

39) 「ヒジャーズの指導者 (mīr-e Hijāz)」 イスラームの預言者ムハンマドのこと。



イクバルの歌は出発の鈴の音である  
再び私たちは歩み出す<sup>40)</sup>

ナショナリズムすなわち一つの政治概念としての祖国<sup>41)</sup>

酒も酒杯もジャムシード王も変わってしまった  
酌人は厚遇冷遇の新たな方法を編み出した<sup>42)</sup>  
ムスリムもまた新たな聖地を創り出し  
文明のアーザルは新しい偶像を彫り出させた<sup>43)</sup>  
これら新しい神々の中で最も重要なのは祖国  
それが纏っているのは宗教に着せる屍衣である<sup>44)</sup>

新文明によって彫られたこの偶像は  
預言者様が建てられた宗教の家の略奪者である<sup>45)</sup>  
おまえの腕は一神教の力で強固  
イスラームがおまえの祖国、おまえは預言者様の民である  
かつての光景を今の時代に見せてやれ  
預言者様の民よ、この偶像を葬り去るがよい

特定の場所に囚われれば結果は滅亡  
魚のように、祖国に縛られることなく、大海にいるがよい  
祖国を捨てるのは神が愛された御方の範とすべきお振舞いである<sup>46)</sup>  
おまえもまた預言者様は正しかったと証明しなければならぬ  
政治で議論される祖国と  
預言者様が教え給うた祖国とは別物である

これがあるために世界の諸民族は対立し  
交易の目的は征服となる<sup>47)</sup>  
政治には信義がなく  
弱者の家が襲われる

40) 「鈴」 駱駝の首に付けられている鈴。出発時、駱駝が立ち上がり、鈴が鳴る。「鈴の音」は出発の合図ということ。ここから詩集の題名が採られている。

41) 初出情報なし。

42) 「酌人(sāqī)」美しい酌人は時には優しく、時には冷たく客に接し、酌人を慕う客の心を悩ませる。この詩句では、世界の体制が一変したことが指摘されている。

43) 「アーザル(Āzar)」偶像製作者の名前。アブラハム(Ibrāhīm)の父の名前とする注釈や辞書もある。

44) 祖国の偶像化により宗教(イスラーム)が否定されるということ。

45) 「預言者様」イスラームの預言者ムハンマドのこと。

46) イスラームの預言者ムハンマドのヒジュラ(聖遷)に言及している。

47) 「これ」祖国という偶像を指す。

これがあるために神の被造物である人間はいくつもの民族に分裂し  
イスラームの紐帯が断ち切られてしまうのである